

## 再発見 “ The History of the Laws Rugby Football ”

ラグビーを楽しむのに役立つ必読書にルールを歴史を書いた本があります。ルールの歴史からラグビー発祥の経緯や今日までの発展の過程が分かりラグビーの良さやアイデンティティーと言われているものが理解できるようになり面白さが深くなり楽しさが拡大されます。

書名：The History of the Laws Rugby Football

筆者：Admiral Sir Percy Royds

出版年：1949年

第1版は1949年に出版されました。その後の年代については第2版に引き継がれています。尚本書は今日絶版となっています。

1948年にPercy Roydsに書かれたIntroductionによって始められています。Introductionの中に彼の人生観・スポーツ観・LAW観などについて引用も含めて核心をつく名句が残っています。

“ Men may come and men may go, but I go on forever, ”

“ Laws may come and Laws may go, but the game goes on forever. ”

そしてラグビーに関しては次のように書かれています。

“ It was not a bad game ; the greatest beauty of it was that there were no rules ”

ラグビー精神はLawに書かれているといわれますが、Lawを守るということはLawに込められた精神を具現化することであることを忘れてはなりません。

ラグビーはhistoric occasionによって誕生したと考えられていますが、ルールの歴史は長い間の時間的産物で自然発生的に合理性追求の過程で作りがられてきました。

全体は大きく4つの部分に分けられ、1本の樹木のような構成になっています。

第I条は地面即ち地面に根を下す部分です。次に22の条項からなるII条からXII条は大きな枝を形成し、以後の条が枝となり更に葉となって1本の樹木となっています。

第I条、第II条はケースローを文字にしたもので定義集とも言われています。

第III条から第XII条に及ぶ第3の部分はケースローに加えて、競技を楽しむ部分についての色々な工夫が文章化されたものです。

第XIII条以下の第4の部分は競技が普及・発展する過程で論議を重ね改訂を加えてきた補充の部分です。条項によって異なる頁数からも議論の跡が分かります。

knock-on、throw-forwardを始めとして第II条で規定されたものが再びLAWの項目となって上げられています。それらは2つのLAWではなく、1つのものです。ラグビーが普及発展する過程におけるプレーの流れや大きさは社会の風潮やスポーツ観などが考え方として影響しています。

プレーとLAWとではプレーが先にあってLAWが導きだされているのです。机上で考えだされたものでも、計算づくで作られたものでもありません。プレー中で問題となったケースケースで設けられる話し合いの中で議論され導き出されたものです。

本文の条項をLAW IからLAW XXXVIまでページ数も含めてまとめてみました。LAWの推移と筆者の苦勞を知ることが出来ます。

<i>Law</i>		<i>Page</i>
I.	Plan of Field	1-4
II.	Definitions	2-27
	Beyond, Behind, In Front	4
	Dead	4-6
	Drop Kick	13-14
	Drop Out	14-16
	Fair Catch	6-10
	Field of Play	10
	Free Kick	16
	Goal	10-12
	Grounding Ball	12-13
	Kick	13

	Kick Off	16-18
	Knock - on, Throw-forward, Rebound	19-20
	Mark	20-21
	No-Side	21
	Offside	21
	Onside	21
	Penalty Kick	18-19
	Place Kick	14
	Punt	14
	Scrummage	21-22
	Tackle	22-24
	Touch Down	24-25
	Try	25-27
III.	Ground	27
IV.	Ball	27-28
V.	Player's Dress	28-29
VI.	Appointment of Referees and Touch-Judges	29-31
VII.	Method of Scoring	31-33
VIII.	Time	33-35
IX.	Toss	35
X.	Functions of Referees	35-56
XI.	Function of Touch-Judges	56-60
XII.	Number of Players	60-62
XIII.	Mode of Play	62-68
XIV.	Knock-on or Throw-forward	68-71
XV.	Scrummage	72-121
XVI.	Tackle	121-131
XVII.	Lying on the Ball	131-132
XVIII.	Offside	132-146
XIX.	Onside	146-148
XX.	Charging and Obstruction	148-157
XXI.	Kick-Off	157-161
XXII.	Drop Out	161-164
XXIII.	Free Kick	164-175
XXIV.	Penalty Kick	175-187
XXV.	Place Kick at Goal after Try	187-198
XXVI.	Try	198-206
XXVII.	Touch	206-217
XXVIII.	Wilful Throwing into Touch	217-219
XXIX.	Touch-in-Goal	219-221
XXX.	Ball, etc., Touching Referee	221-224
XXXI.	Ball held In-goal	224-226
XXXII.	Taking Ball over own Goal line	226-229
XXXIII.	Infringements in In-goal, etc.	229-230
XXXIV.	Foul Play, Misconduct	230-237
XXXV.	Waste of Time	237-239
XXXVI.	Irregularities not provided for	239-241

条文の中に

In 1866 the original plan in the “Laws of Football as played at Rugby School ”

という表現があります。

1866 年ルールの大整理が行われたのです。

拙著「ルールより見た 100 年程前のラグビー」は 1866 年代のルールを抜き出して、現在のルールとの比較するために作成した研究資料の一つです。

参考資料

# ルールより見た 100年程前のラグビー

1976年04月01日

西川 義行

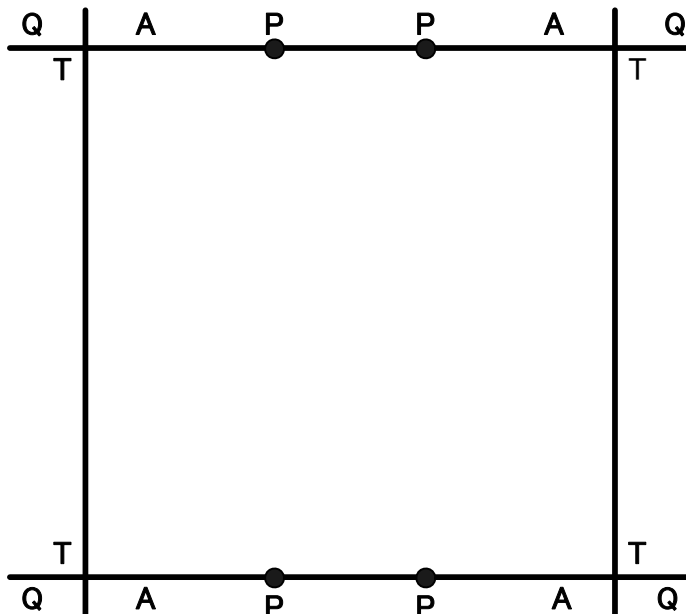
## 序

ラグビーを楽しもうとする者にとって、ラグビーの誕生の様子を知るとともに、創成期以来今から 100 年程度前に至る間の試合の様様を知りその頃の規則の大略を知ることを手始めに規則の流れを知ることによって現在の規則を正しく理解し本当に楽しく良いプレーをすることができるものと思います。

### 1. 競技場はどのようにかわったか

ラグビーは創世記には丘あり小川ありといった原野で村と村が多くに人を出し合っボールをとり合うゲームでしたが、少しずつ制限を設けていって今日のような形や大きさになったのです。規則として文字ではっきり表されているのは 1866 年が最初です。

「ラグビースクールで行われたようなフットボールの規則」ができたのが 1866 年です。その規則が最初ですが、それには長さの規定はなくゴールポストについてきめられていただけです。ゴールポストは高さ 11 フィート (約 3.3m) 以上で両方のポストは 18 フィート 6 インチ (約 5.58m) はなく、地面 10 フィート (約 3m) の所にクロスバーをつけてなっています。タッチラインとゴールラインに囲まれた部分を活動場所(field of action)とよび、ゴールラインはインゴールとされ、インゴールには限りがなく、デッドボールラインについては何も書かれていませんでした。ゴールポストがこんなに細かく規定されていたのは勝敗に直接関係したからです。1874 年になりますとグラウンドは以下の図のようになります。



AA : ゴールライン  
TT : タッチライン  
PP : ゴールポスト  
QQ : タッチインゴール  
〈正方形で寸法の規定はありません〉

### 2. ボールについて

ボールについての詳しい記録はありません。1892 年になって始めてボールの長さや重さが規定されています。1829 年の記録に「ラグビー開始に当たり中央でとり合いのために放り上げられた大きなボール・・・」というのがありますが、細かいことはわかりません。今のキックオフとは大分ちがいますね。ラグビーの楕円のボールについては誰でも何故あんな形にしたか、といった興味を持つと思います。いろいろなことが言われています。創世記は円形のボールでした。ただあの楕円のボールを蹴ってみたりまたは持って走ってみたら丸いボールよりもよいことだけはたしかにわかりますね。更に地面に落ちた時どちらにころぶかわからないといのもなかなか妙味のあるものです。現在のボールはラグビーを楽しむために工夫された一つのたまものだと考えましょう。

### 3. プレーヤーの服装

プレーヤーの服装についても詳しくことはわかりませんが、1892 年頃にはよく目立つような単純な縞模様にするようになっていたようです。1823 年頃ラグビーゲームは「Kicking Camp」

と呼ばれ靴をはかないで行われました。靴を履いてするのは別に「Savage Camp」と呼ばれました。向こう脛けるハッキングが許されていた時代ですから靴を履くと履かないとでは大変な違いがあったことでしょう。1829年の試合の様を描いた中に「傷ついた向こう脛、負傷した頭、破れた衣服、帽子は失われ・・・それらは事故としては小さいものだった」とありますから相当激しいものであったことがうかがえます。帽子とありますがどんなものだったのでしょうか。

1857年になるとストッキングという文字が見られますからその頃になるとストッキングを履いていたことがわかります。1864年頃、ラグビーの靴は特に「Navies」と呼ばれていました。言葉の意味は掘り起こす機械の事です。素足では十分なプレーができないから靴を履くようになった反面おそれられていたようです。1866年には「靴の底や、踵に突き出た釘や鉄の板をつけてプレーすることは許されなかった」と書いてあります。

#### 4. プレーヤーの数

創世記、村と村との争いでは90~150人位の人々が群集となしてボールを奪い合いました。1602年にも「プレーヤーの制限はない」と書かれています。1871年頃になると大体20人で行われたようですが、規則としては決められていませんでした。その年イングランド対スコットランドの試合はFW13人、HB3人、TB1人、FB3人の計20人で行われています。1875年頃の大学では15人で試合をしています。同じ頃スコットランドが国際試合は15人でしょうと申し入れています但し取り上げられていません。はっきり15人になったのは1892年頃で当時のハンドブックに「一方15人」となっています。

#### 5. レフリーとタッチジャッジ

創世期にはレフリーもタッチジャッジもありませんでした。トラブルがあれば話し合っ解決したのでしょう。1866年に「2人のアンパイヤをおかねばならない」とありますが記録に残っている最初です。当時はレフリーといわないでアンパイヤといいました。アンパイヤとレフリーの意味の違いを考えてみましょう。

アンパイヤは「a person chosen to act as a judge in a game」であり、レフリーは「a person to whom something can be referred」です。アンパイヤがレフリーになったことはラグビーを楽しむために非常に大切なことです。プレーの判断は“任せた人(レフリー)”に任せてプレーヤーはただベストを尽くすことに心がけないといけません。参考までにその後の経過をたどってみましょう。

1874年に「両チームのキャプテンは全ての論争の唯一の調停者であり試合の前に意見を交換しておく必要があった」とありますから、アンパイヤ(判決者)としてキャプテンがトラブルを解決していたことがわかります。1881年には「ニュートラルアンパイヤ」(中立アンパイヤ)という記録があり、中立であることが強調されているようです。レフリーという言葉が初めて出てくるのは1884年にスコットランドとウェールズの国際試合をアンパイヤなしで一人のレフリーで試合をしたのが最初です。その結果がよかったのでしょう。翌1885年の規則には「試合には2名のアンパイヤとレフリーをきめる」とされています。タッチジャッジが最初に出てくるのは1890年のことです。3人もいたアンパイヤとレフリーの仕事の分担はどうで合ったかという、記録では「アンパイヤは杖を持ち、レフリーは笛を用意して試合中アピール(当時はプレーヤーが相手の不当を申し出た)をアンパイヤが認めたら杖を上げるようになっていました。1人のアンパイヤが杖を上げ、もう1人アンパイヤが杖を上げない時、レフリーは杖を上げなかったアンパイヤと相談することなくアピールを認めるならば笛を吹いて試合を止めました。反対にレフリーがそれを認めなかったら試合は続行されました。また2人のアンパイヤの杖が上げられた時はレフリーがそれを認めるべきでないと判断した時以外は笛を吹いて試合を止めました。アピールについては原因になる事柄があった時に直ちにアピールしないと後では出来ないことになっていました。決定もアピールされた事にだけなされました。一方、アンパイヤとレフリーは出来るだけ試合の進行を妨害しないように規定されていました。仕事の分担は以上なのですがこの3人制もなかなかうまくいかなかったようです。いろいろな工夫を経て、1926年の記録に「1人のレフリーと2人のタッチジャッジ」というところからアンパイヤという言葉が消えていますからその頃になるとレフリー1人に任せるようになっていたのでしょう。任されたレフリーがニュートラル(中立)であることは中々大変だったようです。レフリーの役目は大変ですが「ラグビーボールの規則の歴史」の本の中で2ヶ所だけアンダー

ラインがされていますがその1ヶ所は、レフリーは反則があっても相手側に利益があればアドバンテージルールを適用して笛を吹いてはいけないというところであるのは大切なことです。

## 6. ゴール

村対村が90~150人位の人数で丘あり小川ありといった原野をボールを奪い合った創世記の試合は激しいものだったと思います。ボールをキャプテンの家へ持ち込んだ方が勝ちとしたり、一定の場所に置いた方が勝ちと決めて争いました。時には一方のチームが川の中にボールを沈めてしまおうとすれば他方がそうさせまいと争うこともありました。だんだん工夫されてキック無しでボールをまわし合って、ボールを持っている味方が相手に掴まえられたら1点失い、7点または9点失った方が負けという方法をとった時代もありました。アメリカンフットボールと似ていますね。この方法では2~3時間も戦われたと言うことです。1866年になると2ゴール(2本のゴールポストとバーの上の空間にボールを蹴り込む)とった方が勝ちで、どちらも2ゴールとれなかったら3日以内に延期することになっていました。

試合開始のトスについては詳しくわかりませんがコインを投げて先行を決めたことは他の競技と同じだったようです。創生期にはボールを投げ上げることによって開始されました。1862年になって、グラウンド中央のプレースキックで始めるように決められています。1866年にはトスで勝った方がサイドを選び中央のプレースキックで始められ、キックオフよりゴールは出来ないこと、相手側は10ヤード離れていなければならないことが決められています。トライについては後で書きますが、その頃は2ゴール得た方が勝ちでした。エリス少年がフットボールの最中にボールを持って走ることによってラグビーが生まれたのですが、無制限にボールを持ってよいではありませんでした。飛んでいるボールは受けて持って走ることが許されましたが、タッチからボールを戻す以外の時は地面のボールを拾い上げることはいけないと決められていました。1823年頃はキッキングキャンプと言われてキック中心としたスポーツでした。ボールを持って走ってくる相手は掴まえないといけません。相手側は「やっつけろ」とか「ボールを奪え」とか言ってかかってきました。

## 7. タックル

タックルについては1602年に「帯の下をつかまえてよい」という表現があります。1866年になるとモール(maul)という言葉が使われて、ボールを持っているプレーヤーが相手側の一人またはそれ以上のプレーヤーによってつかまえられ脱出出来ないか、味方にボールを渡せない時につかまったプレーヤーは「よした!」(have it down!)と叫んでボールを離すようになりました。モールの中では出来るだけ早くボールを離さないと、相手は「やっつけろ」とか「倒せ」とか「ボールを奪え」と言ってかかっていきました。このようなモールは15分も続くことがあり時間の浪費となりました。タックルといえば、倒すことと思われていますが元来タックルはつかまえることなのです。つかまえて止めるのがタックルです。

## 8. ノックオン、スローフォワード

ノックオンやスローフォワードについては1866年の規則に許されないとあるだけで詳しいことはわかりません。問題になる場合がほとんどなかったのでしょう。現在のラグビーはハンドリングラグビー(手でボールを処理する)の傾向が強いですからノックオン、スローフォワードは試合中にしょっちゅう起こります。

## 9. キック、オフサイド

キックについての記録は1846年にフリーキックに対するチャージについてのものが最初です。「フリーキックを置いてする時はボールを置くや否やチャージでき、立てるキックする時は蹴る動作を始めるや否やチャージしてもよい」とされています。そして1847年に「プレースキックの時はボールが地面につくや否やチャージしてもよい」と改正されました。1862年には相手が蹴るかノックオンしたボールを直接受けたキャッチをフェアキャッチといい「受けたボールを持って走ってもよいが、踵でマークを地上に印することのどちらかでフリーキックの権利を与えられる」となっています。1866年に、ドロップキックはボールを地上に落して上がってくるその瞬間に蹴るキックと定義され、「プレースキックは踵でグラウンドに小さくぼみを作り、それにボールを置いて蹴るキック」とされていますから、そのどちらかであったのでしょ

う。また、パントについても、ボールを手から落として地面に着くまでに蹴るものとされていますが、今と違ってほとんど行わなかったようです。たまにされたら多くの人々が「ブー」というような声を出して非難したようです。更に次のように整理されました。「フェアキャッチがなされた時、相手側はマークの前方に立ってはいけぬ。マークの所に立ってもよいボールを受けたプレーヤーはマークの後方からドロップキックまたはプレスキックする。キッカー側は蹴られるまで妨害出来ない。ドロップアウトの場合は、キッカーがキックの動作を始めるや否やチャージすることが出来る」フェアキャッチの時に与えられるキックを只キックと呼んでいましたが、1866年にペナルティの方法としてのフリーキックが紹介されてから区別してフリーキックと呼ぶようになりました。ペナルティキックはどうだったんでしょう。ペナルティキックの歴史は闊の歴史になるのですが、最初は罪があって罰が無かったようです。今日ペナルティキックを科されますオフサイドについては、創生期の記述の中に「前方に進んでいたガードがボールを持って走っている味方より前で妨害した・・・」というのがありますから、オフサイドははいけぬということがなかったのでしょうか。1846年のラグビースクールのルールの中に「ボールに触れたプレーヤーより前にいるプレーヤーは、相手側に蹴られるオフサイドにある(a play is off his side)」とありますからオフサイドの規定がはっきり出来ていたといえます。そして、オフサイドにあるプレーヤーはゲームの外にあると考えられ、ボールに触れても相手を妨害してもいけないし、ボールを持つこともできないとされていました。それが1847年に「オフサイドにあるプレーヤーは、相手側がボールを蹴るか投げるか、キックを受けて持って走るまでオフサイドである」と決められていますから、オンサイドになる条件が決まっていたわけですが、オンサイドという言葉が使われているのは1866年が始めです。また、その中に相手側からスクラムに入った場合もオフサイドであると決められています。このようにオフサイドの罪ははっきり確認されていますが、罰は明確ではありません。当時膝より上を蹴ったり、踵で蹴ってはいけぬが、つかまってボールを離さないプレーヤーにはハッキングをしてもよいとされていたのが、ゲーム中における唯一のペナルティと考えられていたようです。しかし、このハッキングも始めはスクラムからボールを取り出すための方式であったのですが、スクラムが終わってからもハッキングが行われてるようになり、改正の必要が考えられるようになりました。罰は以上のものでしたので、エキサイトすればゲームが混乱したこともあったと考えられます。とくにオフサイドに対しての罰を設ける必要に迫られてきましたが、ラグビー協会(RFU)としては、何らかの罰を科することが決められました。フェアキャッチの時のフリーキックと区別してペナルティの方法としてのキックと言われました。そして、ゴールしても得点出来ませんでした。

ペナルティキックは、スポーツマンシップだけでは解決出来ない故意でないオフサイドを罰するものでしたが、プレーヤーがスポーツマンシップだけでゲームが満足な状態になるように努力することは本当に大切です。オフサイド気味のプレーなどは、スポーツマンシップに反するものです。例え故意でなくても、1つのゲームに1チーム10ヶ以上のペナルティキックが科せられるというのはいけぬことです。個人の反則の繰り返しは退場ということになっていますが、反則は多分にチームの責任ですから暫定的にペナルティ10ヶ以上は反則負けといった方法をとるのも面白いと思います。

## 10. スクラム

今日、スクラムはプレーの中で最も重要なものの1つであり、ルールもよく整備されていますが、創生期の模様はわかりません。ただ、激しくぶつかり合い押し合って、20分位も続いたということですから今のルーススクラムや所謂みこし状で激しくボールを奪い合ったのでしょう。1862年になって始めてスクラムの中でプレーヤーをつかむのはよいが、首を絞めて窒息させるようなのははいけぬと決められました。1866年には次のように書かれています。「ボールを持っているプレーヤーが相手側につかまりボールを地上に落した時、ボールをとり集まった集団がスクラムであり、スクラムの中のボールに手を触れてはいけぬ」と決められています。また、同じ規則のペナルティの項に「止まっているボールを拾い上げたり、タッチからのスローインをノックオンしたり、キックオフまたはドロップアウトのボールがタッチに出てしまったり、ゴールの中でモールが出来たりした時にはスクラムとなった」とありますが、しれが今のセットスクラムに当たるものだと思われそうですが、はっきりと記されているのは1905年の記録が最初です。それには「フィールド・オブ・プレーだけで行われる。地上にあるボールの

周りに両チームからの1人ずつまたは2人以上のプレーヤーで組まれている(ルーズスクラム)が、またはボールが両方の間に入れられるのを取り合う準備をして密集している場合(セットスクラム)となっています。セットスクラムを組み人数の唯一の制限があります。フロントロー3人というのは1922年のノートに始めて付け加えられています。それまでスクラムは両チーム1人またはそれ以上のプレーヤーによって組まれるとあってだけです。

スクラムは今日まで色々研究され、ルールも改正されてきました。ボールインの速度一つにしても「、ゆっくりとか速くとか、中庸にとか表現がかわっています。

### 11. タッチ

次にタッチですが、広い荒野に線を引いて区画を決めた以上、それより出た時はどうしたのか決まっているはずですが、記録としては、1866年が最初です。即ち「ボールがタッチラインより出た時は最初にタッチダウンしたプレーヤーがタッチラインより出たところへボールを持って来て、(a)タッチラインと直角の線上にボールを受けるために立っているプレーヤーに投げるか、(b)フィールドオブプレーで一旦バウンドさせて、それを持って走るかドロップキックするか、(c)ボールを持ってタッチラインと直角の線上を走り、二列になって待っていた両チームFWの間を通り、10ヤードから15ヤードの間にボールを置く。この場合始めに何ヤードの所に置くか宣言しておく」といった具合であります。1874年には以上3つの外にボールを持っているプレーヤーがタッチより出た時は、ボールを持っていたプレーヤーが、先の3つの方法をとることが付け加えられています。1878年にノットストレートの場合のことも述べられています。1880年には最後にプレーした反対側が投げ入れることになっています。そして1905年になって、それまであった3つの方法が、(a)タッチラインより直角の方向に投げるのと、(b)タッチラインから10ヤードの所でスクラムを組む、の2つになっています。これで一応形が整ったといえます。1964年ルールの改正で、ボールを持っているプレーヤーが押し出された時にはボールを持っていた反側側が投げ入れるというふうになりましたが、攻撃側有利の原則を破る改革と言えます。ボールを持っている攻撃側にオープンに展開させる義務を負わせたのでしょう。蛇足ながら、故意にタッチにボールを投げ入れた場合のことは、1912年に、それについての規則が紹介されるまで、それが許されないというヒントさえもなかったということです。1912年より少し前に、ゲームの精神に反する好ましくないプレーが見られるようになったのでしょう。

### 12. トライ

最後にトライですが、1830年頃まではゴールに“run in”することによってトライが認められました。1846年には“run in”は、地上のボールを拾い上げたりタッチを通ったりしていなかったら誰でも出来ると付け加えられ、1866年には「相手印ゴールに入ったボールを味方がタッチダウンした時、それを“run in”と呼ぶ。“run in”はゴールラインのどこを横切ってもよい」となっています。“run in”から“placing”そして“grounding”とトライの方法も変わっています。同じ規則の中にタッチインゴールについて、「ボールがタッチインゴールに入るとフィールドから出たものとみなされ、そのゴールの側によって取り出される。それは自分自身のゴールにタッチダウンしたかのようなものである」と出ています。ゲーム再開の方法はドロップアウトですがゴールから25ヤード以上離れてキックしてはいけないとされているだけでキックの方法には何も触れてありません。

### 結び

100年前頃の競技の様子は大体以上のようなものでした。1866年以後ゲームが色々工夫され、ルールも何度か改正されましたが「ラグビーはプレーヤーの楽しみのために工夫されたゲーム」だということを忘れないでください。「ラグビー精神」という言葉がよく使われますが、ラグビーは人間が作ったものである以上、ラグビーそのものに精神なんてありません。ラグビー精神とは、ラグビーを生み、ラグビーを育てた先輩たちのラグビーを愛した気持であり、方法であると思います。その意味で、昔の模様を知ることは大切だと思っています。次に一つ一つについて、年を追ってどのように推移していったかを書きましょう。